

さく　　みち　　しん　　すけ
作　　道　　信　　介

学位の種類　　博士(文学)
学位記番号　　文第189号
学位授与年月日　平成14年3月7日
学位授与の要件　学位規則第4条第2項該当

学位論文題目　　近代化の社会心理学

論文審査委員　　(主査)

教授 大橋 英 寿　　教授 畑 山 俊 輝
教授 高 城 和 義
教授 大 淵 憲 一

論文内容の要旨

本論は、17世紀以来大規模かつ緩やかに進み、工業生産の飛躍的進歩、交通機関の発達、世界市場の成立、技術革新、マス・メディアの普及により、ここにきてその速度をは早めた近代化のなかで、私たち、社会心理学がどのようなアプローチをとりえるのか、その可能性を3つの領域—出稼ぎ、病気・健康、フィールドワーカーで考察したものである。

本論は特定の主題についての論考ではない。扱うトピックスは青森県津軽地方の出稼ぎから東アフリカ・ケニア・トゥルカナにおける“ねだり”まで多様である。しかし、全体として、本論は近代化による私たちの意識構造や生活世界の変化を主題としている。理論的背景として社会的構築主義に立ち、アプローチとして脱構築的「社会的プロセス分析」と構築的「日常化分析」を企図し、方法として広義のフィールドワークによっている。

本論構成は全3部8章からなる。以下第1章および8章より「近代化の社会心理学」の基本的立場を要約し、最後に各論を紹介する。

1. 近代化の社会心理学—第1章および第8章

1) 社会的構築主義

私たちは日々の生活を“つつがなく”すごしている。日常生活は私たちにとって圧倒的な自明性をもってたちあられる。この日常生活の自明性の分析が本論の主題である。どのようにしてこの自明性が確立・維持されているのだろうか。バーガーらによれば、いかに自明性をもって現れたとしても、現実はある特定の社会的歴史的条件のもとに構築された暫定的な現実すぎな

い。自明の現実と言語を介した社会的相互作用過程を通じてつくりだされていく。相互作用過程は、制度にみられる客観的現実定義と個々の経験に根ざした主観的現実定義が会う場である。現実はその両者の弁証法的出会いのなかで構築され維持されると同時に、変革される可能性をも得るのである。このような観点から社会的現実の構築プロセスを分析する立場は社会的構築主義〔以下構築と略す〕といわれ、本論もこの立場にくみするものである。

構築的理解は3つの特色をもつ。第1は、既成の学問的知識を脱構築する批判理論としてのそれである。心理学になじみ深い「パーソナリティ」を例にとると、構築的アプローチは「パーソナリティ」をすでにあるものとして見なさず、それが社会的相互作用過程を通じてどのようにかのごとく構築されたのかを検討する。既存の心理学的「パーソナリティ」をひとつの言説として扱う。心理学的「パーソナリティ」は、特殊な言語コミュニティにおける帰属のレパートリーとなる。構築的アプローチは、心理学の営みを特権化せずリアルな社会関係においてとらえることを可能にする。第2に、自己の繰り込みをおこなう。自己を状況から超越した立場に置かない。現象をそこにいることによって理解する。これは当事者の語りや釈明、説明に耳を傾け、その語りを自分と相手との、その時その場の関係や過程でとらえる現場での志向をふくむ。第3に、このような姿勢は、従来は軽視されがちな相手側を、あるいは制度的に定義された平面的な個人を、多面的な個人として議論に加える必要性を生む。ここに、超越的な立場にいる研究者を実践に引き込むきっかけがある。実践への橋渡しをする働きである。これは学問的知識の還元や適用ではない。私たちが手にするのは、状況を相手と共にすることによって得られる状況依存的な知識である。

2) 近代化—知識の再帰的占有

現実の社会的構築は真空のなかでおこなわれているのではない。近代という歴史的社会的状況のなかでおこなわれており、それが私たちの意識に特徴的な構造をあたえている。ギデンズは、近代化の特徴を時空の分離、脱埋め込み、知識の再帰的占有の3つにより縮約した。日常生活は専門家システムと彼らの特殊な用語、象徴的トークンによって脱埋め込みされ、分節化され、商品として流通し、再び別の時空に埋め込まれる。“医学的”には赤ワインに多量に含まれるポリフェノールが過剰な活性酸素やコレステロールの酸化を阻害する。このような赤ワインの効用はそれまで何気なく飲まれていた赤ワインを療法化する。療法化には医者や“健康療法家”といった専門家システムの推奨、効用の医学用語による言い換えが下支えし、赤ワインは企業によってより“販促”される。私たちは健康法として赤ワインを再び自己の日常生活に埋め込む。赤ワインの再飲によって、私たちは自己の健康をコントロールする感覚や他の多くの赤ワイン愛飲者と同じという、想像的な中流意識を得ることができる。医学からみれば、このような知識の普及は“素人療法”であるが、このような“あふれだし”をコントロールすることはできない。一方、愛飲する私たちは健康理論を実践しながら他の健康理論を実践するグループなどに参加しつつ、健康不安を払拭し、日常化の実践に励む。私たちは医学的裏付けをささえに、赤ワインの飲用を日常生活に再埋め込みすることで、それ以前とは異なる知識や人的資源をえることができた（エンパワーメント）のである。この例は近代における知識の再帰的占有がもたらす医療化—脱医療化の運動であり、本論第2部でとりあげた。

3) 近代化－現場へ

学問的知識の再帰的占有についてはもちろん「心理」もその例外ではない。近代についての認識を導入することは、心理学がすでに所与のものとしてあつかい、近年ますます社会的に広く実体化されつつある「心理」自体を構築されたものみなすことである。「心理学化」とは「心理」をトークンとする専門家システムおよび「心理」を“貨幣”とする市場が成立することである。カウンセラーにかかるクライアントは自己の問題を「心理」の問題だとすでにわかっており、カウンセリングがどのようなものであるかということを知って現れる。そのためカウンセリングは治療上の紆余曲折はあるにせよ、円滑に展開する。カウンセラーにとってはますます「心理」の問題が現代の主要な問題として現れる。「心理」学的知識は再帰的な現実構築のプロセスにあり、研究者にとっては「心理」的現実とは自明な“真実”としてたちあらわれる。一方、私たちにとってみれば、「心理」は互いの行動の背後にある、行動の説明的解釈的帰属の場である。「心理」は相手を納得させたり説得する根拠として働く。たとえば、「心理的ストレス」は職場を休む公的な理由のひとつである。職場を休もうとする者は「ストレス」を賭金に、雇用主や同僚にたいして、自己の生活空間の確保や生活上の都合や利得をえる。近代における制度の特徴は、ギデンズのいう「脱埋め込みをとげた制度」であり、「ローカルな営みをグローバル化した社会関係に結びつけ、日常生活のほとんどの側面を組織化していく」注1)。しかし、一方で、私たちはそのような制度の働きかけに対して、受容、無視、拒否、対抗、利用、無効化といった対応をとる。波乱ある生活を日常化し、自己のアイデンティティを確保するため、制度的働きかけのなかでライフ・ポリティックスを駆使するのである。この観点からさきのカウンセリング場面は、カウンセラーにとっては治療場面であるが、クライアント側にとっては必ずしもそうではない。「心理」をめぐる、クライアントとカウンセラーが現実定義にしのぎを削っており、クライアントにとってカウンセリング体験は日常生活を有利に構築するための根拠になるかもしれない。

生活世界は他者が不在な平穏な主観的世界ではない。日常生活の現実とは、多様な言説のあいだで、私たちの生活史的な背景のなかで、その場を構成するエージェントとのやりとりを通して、生き生きとした現実として更新される。さまざまな制度、そのエージェントとの相互作用、家族ダイナミクス、地域社会のネットワーク、利用可能な社会的資源、経済的資源、将来展望・過去回顧、さまざまなレベルでの意味づけのための文化的体系、これらの歴史的な積み重ねによって、不断に構築され続ける現実である。社会心理学的アプローチは、個人と社会・文化体系が出会う、現実的、状況的場面の把握注2)を志向するのである。

4) アプローチと社会的位置取り

さきの近代認識のもとで、社会心理学にはふたつの応えるべき問題がある。心理が社会的構築物として括弧に入れられ、“客観的”、“絶対的”真理としてではなく、「心理」という一言説として再帰的に流通するとすれば、社会心理学であれいかなる「心理」学がありえるのだろうか。どのような理論や方法によって立てばいいのだろうか。また、社会的な仕組みとして「心理」の生産現場にいることが明らかになったとき、大学という制度、研究者という専門的システムの一員として、どのように研究に携わるべきなのだろうか。ふたつの問いはアプローチの問いと社会的位置取り social positioning の問いとよぶことができ、密接に関連している。

(1) アプローチ

アプローチとしては、脱構築的な「社会プロセス分析」と構築的な「日常化分析」がある。前者は現象を自明であらしめる社会的相互作用の分析である。これは現在から過去へ、現象が生じる現場から社会構造へ向かう分析である。主に、公文書や新聞といった文書データやインタビューを資料とする言説分析が主である。もうひとつは、「日常化」の分析である。「日常化」は個人が日常生活をつつがなく過ごすためにおこなう働きかけや工夫の総体である。これは過去から現在・未来へ、現象が生じるその場面へ向かう分析である。インタビューや参与観察によって、場面自体をとらえる。

児童相談所における不登校事例の歴史的推移を例としてとりあげよう。要点を述べれば、昭和20年代から30年代では地域とのつながりのなかで児童の生活環境整備を行っている。ケース導入時以外相談所の動きは活発ではない。相談所は“不登校”のケースを持たない。40年代においては家庭のしつけがクローズ・アップされる。地域社会というより、家庭、学校が個別の機能的なエージェントとしてあらわれ、それぞれに対応をおこなう。50年代にはいると、精神科医、心理学者など専門家が登場し、判定用語も多様になる。不適応や神経症的な不全が指摘される。特定の原因や責任主体は指示されない。しかし、不可抗力の“病気”と位置づけられることで、結果として家庭に原因が帰属される。相談所は不登校のケースを持ち、制度的な対応を確立する。以上は、現時点において、その対応プロセスや意味づけが自明視されている「不登校」が歴史的にどのように構築されてきたか、そのプロセスにはどのようなエージェントが関わっているのかを明らかにするアプローチである。これを「脱構築的社会的プロセス分析」とよぶ。医学的・心理学的言説や官僚制度的な言説、手続き論が記載されている資料を基にする。

しかし、現実の構築は書類の記載につきるわけではない。親、子ども、教師、相談所員が向き合う場面での、相互作用こそが現実定義や意味付与がおこなわれる現場である。親・子の側からすると、相談所への相談は「日常化」の一場面である。相談所に定期的に通うことで、それまで問題状況であった日常生活が一定のリズムとパターンをとって構造化される。また、相談所への登校は学校へ不登校を説明する有力な対抗定義として、役立つかもしれない。現実理解のためには、両アプローチは相補的にもちいられるべきなのである。

(2) 社会的位置取り

このアプローチは当然、そのようなアプローチをとる研究者も除外しないことを留意しておこう。何らかのかたちで、研究者はこの現実構築に参加することになる。また、参加するような立場にいないければ調査が不可能なのである。このように問題の発生から現実構築の過程をできるだけ、現場に近い位置でとらえるという姿勢が近代化の社会心理学に要請される。つねに自己の位置づけが求められるゆえんである。

社会的位置取りの問題をふくめて、私たちのアプローチを概観を試みよう。私たちは二重の括弧入れをおこなう。第1の括弧入れは、当事者間で維持されている日常生活の自明性を括弧にいれる、脱構築的アプローチである。このとき、研究者の解釈や説明は一言説にすぎない。その自身の言説の自明性を括弧にいれるのが第2の括弧入れである。二重の括弧入れは、研究者からみると、当事者間の自明性を括弧に入れると同時に、自己の分析道具の自明性も括弧に入れることになる。学問的道具は暫定的な枠組み、橋頭堡として設定される。この枠組みが実際の社会的プロセスのなかでどのように用いられ、変容し、ときに解体されていくかを示すこ

とにより、新しい現実の提示が可能になる。現実が多面的でつねに理論や方法が枠づける現実より豊かで深い。これは学問的枠組みを自明視して、現実を“応用”、“適用”、“還元”する態度とはまったく異なるのである。

2. 各論紹介－第2章から第7章まで

第1部では青森県津軽地方の出稼ぎをめぐって、文書データをもとにふたつのアプローチを行っている。第2章は文書データから出稼ぎのリアリティを再現しようとする試みである。ここでは、私は出稼ぎを近代化のエージェントとしてとらえている。戦後高度経済成長期の出稼ぎはムラから都市への一時的な移動を激化させただけではない。軍隊経験がそうであったように、出稼ぎは賃労働による雇用関係、部品を集積し完成させる生産過程、時間管理、出来高払いの給与形態などを通じて、出稼ぎ者の意識構造を大きく変化させ、ムラの変貌の促進因として働いたという仮説を提示した。用いた資料は弘前児童相談所が昭和23年から保管しているケース書類である。

第3章では、地方新聞の出稼ぎ関連記事を戦前からたどることで、出稼ぎ言説の編成過程を明らかにした。明治大正期において出稼ぎはごく自然に日常生活に埋め込まれており、その悪影響が語られることはなかった。昭和戦中期にかけて、出稼ぎは制度が把握すべき労働力となり、戦中期には「産業報国」のため出稼ぎ自体が姿を消す。戦後高度経済成長期にはいと、家族そろって暮らすマイ・ホーム主義の理想、地元で経済的に完結した小さな閉鎖共同体をつくるという理念と対比され、「必要悪」とされる。しかし、失業保険問題を境に、行政側も出稼ぎを支える言説を表明する。以上のようにみれば、支配的言説の中に「出稼ぎ」が組み込まれる過程で、言説的共謀が成立したように思われる。それは、青森県の出稼ぎのピークが全国的に見て遅かったことに関連している。他県が人口減少に転じ過疎が問題になりつつある間、依然として出かせぎ者を供給していた。マスコミを介してなされた戦後の行政的言説が出稼解消、縁故就労の抑止をうたう反面、移住者をひきとめ出稼者を保護し、結局は縁故就労黙認の方向で編成されたことから考えると、津軽地方の出稼は両者の共謀によって保存された一種の伝統文化となった観がある。「出稼ぎ」が言説的に制度化されているがために、「故郷」を離れて稼働することが一実際そのような見込みがあるかは別としていつかは故郷へ帰るべき「出稼」と見なされるのである。かつての出稼中心地域は早くから過疎に見舞われた。それら地域は地理的交通的要因によって、このような言説の共謀関係が成立する以前に、急速に出稼の担い手自体が労働力として都市部に吸収されてしまったのではないかと推測される。さらに、生活のベースラインとして確立した出稼という伝統が、過疎を防ぐ、過疎ディフェンスとして機能していたのではないかという展望を提出した。

第2部は医療化社会における健康と病気に関する論考である。そのうち、第4章は、健康第一主義（healthism）について、健康食品の広告から考察した。宣伝広告において、当該食品の効果をどのように説得しようとしているかに着目し、健康言説をとりだしたところ、全68項目が抽出された。それぞれの項目は科学的な成分や効能を示すものから、クレオパトラや中国歴史を指し示すものまである。「健康食品」はこれらの項目によってしかるべきものとして構築されているわけである。本論では「健康食品」をキッシュとして分析する視点を提出した。それによれば、「健康食品」は、健康を気にしたり、そのために特殊な食品、クスリをとるといった裕福なライフ・スタイルを大衆化する。私たちは少し高級なライフ・スタイルをなぞること

で、社会のなかの自らの位置を上方修正して確認し、同時に世の中の大多数の人と同じく健康に気をつけているという中庸さを確認することもできる。また、「健康食品」は私たちに健康不安に抗する根拠をあたえ、多くの“効く”可能性を掌握させてくれる。第5章では、日本において、「アトピー」が現代病として独特の社会的構築をうけてたことを示す。まず、新聞記事分析から、言説として構築された「アトピー」の特徴を取りだした。同時に、そのような言説環境のなかで母親がどのように子どものアトピーに対処したかをインタビュー調査から把握した。言説としての「アトピー」は環境汚染から生活習慣の乱れまでを含んだ広い現代病として語られている。母親の対処には、食事療法派、民間療法転換派、自律的取り組み派がある。食事療法派は、食べ物を制限することでアレルギーの原因物質と湿疹との反応を抑えようとする。そのため、日常生活は、母子が密着しておこなわれる、摂取した食べ物と反応とを確かめる自己実験となっている。民間療法派は食事制限のかわりに鉱泉水による毒素の排出をおこなう。前者が食餌と身体の関係にもとづいて、経験世界を全面的に秩序化しようとするのに対して、後者は秩序のほころびに継ぎをあてるやり方である。自律的取り組み派はさきの両派から距離をおいて子どもの自主性にまかせる。特定の言説環境において病気の体験がどのように組織化されるのか、優勢な言説のなかで「私の体験」を確保する努力を見いだすことができる。

第3部は「観察」を中心とした2つの論考である。第6章「見ることと書くことー「観察」の構築」では、社会心理学の実験を記述する科学的レポート様式と社会学・人類学をふくめた領域でフィールドワークを記述するエスノグラフィーとを各3例ずつ取りあげた。ここでの観察法とは、ある記述様式をもつ研究作品のなかで、観察実践がどのような実践として記述され、研究作品を支えているかという、弁論術としての「観察法」である。社会心理学には2つの弁論術があり、その典型は科学的レポートとエスノグラフィーである。研究作品は現実に対して比喩として働く。そのとき、比喩がどの程度現実を映しだしているかという、リアリティが重要である。近代における知識の再帰的占有から考えると、どちらの弁論術を用いようとも、学問的営為は繰り返し自らのリアリティを確認する必要があることを指摘した。第7章は、アフリカ・ケニア共和国トゥルカナにおけるフィールドワークに関する論考である。まず、ナキナイとよばれる“ねだり”を中心とした彼らとのつきあいが紹介される。彼らの「いま、ここで、たまらない」つきあいと私たちの「かつて（いつか）、あそこで、たまる」つきあいが対比される。文字を持たず牧畜生活を送るトゥルカナを理解しようとしたとき、フィールドワークを支える「参与観察」が調査する側が設定した約束事にすぎないことが明らかになる。トゥルカナの働きかけは私が勝手に設定した約束事を無効にしてしまう。私たちが正当化するフィールドワークという方法は相手との間にこちらから一方的に大幅な共通領域を設定してしまっているのである。しかし、そのような状況下でもなお、フィールドワークが可能なのは「共同実践への構え」があるからと結んだ。第6章は観察法を見るという実践的な方法としてではなく、弁論術として扱い、第7章はフィールドワークの根拠である「参与観察」をひとつの約束事として扱った。結果として、いずれも、観察、フィールドワークの支配的な表象・言説を解体してみせる結果となった。

第8章総括では、一部の社会的構築主義がもつ前提、『「経験の言語化」以前に経験はない…出来事はあるが、経験はない』に疑問を提出している。言説中心的な立場に抗して、言説以前の経験を求めるのではない。結局のところ、私たちは書くことでしか経験を分かちえない社会に生きている。しかし、だからといって、言説以前に経験はないといってよいのだろうか。

オングは私たちが文字の文化を深く内面化していることを指摘しながらも、声の文化の伝統を色濃く引きずっていることを忘れない。インタビューにたちもどってみよう。インタビューによって得られる資料はたしかに「言われてあるもの」という意味では言説である。しかし、インタビューという方法がもつ可能性を言説収集だけに限定することはできない。インタビューによって知りたいのは、「いま・ここで」の相手の言うことをこえて、相手が「～について」話しているその現場である。現場はつねに行き着けない。しかし、たしかに声を発し相手に働きかける現場は存在する。たとえそれがたちまち研究者をふくむ社会的プロセスによって言説化されるにしてもである。

これは言説ではない真の現実があるという本質主義に立つのではない。私たちが産出するのたしかに言説にすぎない。しかしだからといって、言説をこえて、それが産み出される現場へ、経験それ自体への接近は断念すべきではない。そのような怠慢は言説やそれがつくる隠喩的現実を陳腐な死喩におとしめてしまう。一方では現実の言説化があり、他方では言説の現実化がある。私たちの研究活動はこの運動を絶えず続けていくしかない結論づけた。

論文審査結果の要旨

本論文は、急速な近代化の過程で進行しているとす意識構造や生活世界の変化と、それを扱う社会心理学的アプローチの方法論をめぐる諸問題を主題として設定し、それらを出稼ぎの社会的評価の歴史の変遷、アトピー性疾患を事例とする病気・健康観の変容、アフリカ・ケニア共和国トゥルナカでの調査体験を加味したフィールドワーク技法の論議などをトピックにして多角的に論述したものである。論文は8章で構成されている。

第1章「課題・アプローチ・方法」では、A.ギデンズの所説に立脚して「近代化」をクローズアップし、それへのアプローチとしてP.L.バーガーに立脚して「社会的構築主義」を詳述する。それをふまえて社会心理学での構築主義の在り方をパーソナリティ研究を例にとって解説し、さらに内外の先行研究を紹介しつつ多角的に論じ、フィールドワークによるエスノグラフィの重要性を強調する。

第2章「出稼ぎー近代化のエージェントー」は、児童相談所が1948年から保管しているケース書類を原資料にして、出稼ぎのリアリティを再現し、近代化のエージェントとして出稼ぎをとらえている。戦後高度経済成長期の出稼ぎはムラから都市への一時的な移動を激化させただけでなく、出稼ぎは賃労働による雇用関係、部品を集積し完成させる生産過程、時間管理、出来高払いの給与形態などを通じて、出稼ぎ者の意識構造を大きく変化させ、ムラの変貌の促進因として働いたとする仮説を提示する。

第3章「青森県の「出稼ぎ」編成ー新聞記事による分析ー」では、地方新聞の出稼ぎ関連記事を明治期からたどることで、出稼ぎ言説が編成されてくる過程を明らかにしようとする。論者によれば、明治大正期においてはその悪影響が語られることはなかったが、戦後高度経済成長期に入ると、家族そろって暮らすマイ・ホーム主義の理想や地元で経済的に完結した小さな閉鎖共同体をつくるという理念と対比され、マスコミや行政機関の支配的言説の中で、出稼ぎは“必要悪”とされるようになった。しかし、生活のベースラインとして確立した出稼ぎという伝統がむしろ、過疎を防ぐ、過疎ディフェンスとして機能していたのではないかと見方を提

出する。

第4・5章は、医療化社会における健康と病気に関する論考である。

第4章「健康への対処－「健康食品」調査から－」は、健康第一主義（healthism）について、健康食品の広告を素材に検討を加える。宣伝広告は、図像やテキストからなり、それらを当該食品の健康効果を説得するレトリックとみなし、全68項目が抽出された。論者に拠れば、「健康食品」はこれらの項目によって構築されており、健康のために特殊な食品、クスリをとるといった裕福なライフ・スタイルを大衆化する。少し高級なライフ・スタイルをなぞることで、社会のなかの自らの位置を上方修正すると同時に世の中の大多数の人と同じく健康に気をつけているという中庸さを確認することもでき、「健康食品」は健康不安に抗する根拠をあたえ、多くの“効く”可能性を掌握させてくれる。

第5章「病いへの対処－乳幼児アトピーをめぐる－」では、日本において「アトピー」が現代病として社会的に構築されたことを明らかにする。新聞記事分析から、言説として構築された「アトピー」の特徴を取りだし、同時に、そのような言説環境のなかで母親がどのように子どものアトピーに対処したかをインタビュー調査から把握する。母親の対処には、食事療法派、民間療法転換派、自律的取り組み派がある。食事療法派は、食べ物を制限することでアレルギーの原因物質と湿疹との反応を抑えようとする。民間療法派は食事制限のかわりに鉱泉水による毒素の排出をおこなう。前者が食事と身体の関係にもとづいて経験世界を全面的に秩序化しようとするのに対して、後者は秩序のほころびに継ぎをあてるやり方である。自律的取り組み派は上の両派から距離をおいて子どもの自主性にまかせる。これらの比較から、「アトピー」が育児のみならず、子どもの遺伝的特質までも責任を負わされる母親の立場と密接に関連していることが見出されたとする。

第6章と7章は「観察」を中心とした2つの論考である。

第6章「見ることと書くこと－「観察」の構築－」では、社会心理学の実験を記述する科学的レポート様式とフィールドワークを記述するエスノグラフィーを各3例ずつ取りあげて概説し、観察法とは、ある記述様式をもつ研究作品のなかで観察実践がどのような実践として記述され、研究作品を支えているかという、弁論術としての「観察法」であると結論づける。社会心理学には2つの弁論術があり、その典型は科学的レポートとエスノグラフィーで、そこからの研究作品は現実に対して比喩として働くが、比喩がどの程度現実を映しだしているかというリアリティが重要だと指摘する。

第7章「フィールド理解－“つらさ”を手がかりにして－」は、アフリカ・ケニア共和国トゥルカナにおける論者自身のフィールドワークをもとにした論考である。まず、「ナキナイ」とよばれる“ねだり”を中心とした彼らとのつきあいが紹介され、「いま、ここで、たまらない」つきあいと「かつて（いつか）、あそこで、たまる」つきあいが対比される。文字を持たず牧畜生活を送るトゥルカナを理解しようとしたとき、フィールドワークを支える「参与観察」が調査する側が設定した約束事にすぎないことが明らかになる。トゥルカナの働きかけは勝手に設定した約束事を無効にしてしまう。フィールドワークという方法は、相手との間にこちらから一方的に大幅な共通領域を設定してしまっているのであるが、そのような状況下でもなお、フィールドワークが可能なのは「共同実践への構え」があるからとの結論を導く。

第8章「総括」では、社会的構築主義がもつ前提、『「経験の言語化」以前に経験はない。出来事はあるが、経験はない』に疑問を提出している。結局のところ書くことでしか経験を分か

ちえない社会に生きているが、しかしだからといって、言説以前に経験はないといってよいのであろうかと疑問視する。例えばインタビューによって得られる資料はたしかに「言われてあるもの」という意味では言説であるが、インタビューという方法がもつ可能性を言説収集だけに限定することはできない。インタビューによって知りたいのは、「いま・ここで」の相手の言うことを超えて、相手が「～について」話しているその現場である。現場には行き着けないが、しかし、たしかに声を発し相手に働きかける現場は存在する。これは、言説ではない真の現実があるという本質主義に立つのではないとする。産出するのはたしかに言説にすぎないが、しかしだからといって、言説を超えてそれが産み出される現場、経験それ自体への接近は断念すべきではない。一方では現実の言説化があり、他方では言説の現実化がある。研究活動はこの運動を絶えず続けていくしかない結論づける。

以上のように、論者は、方法論では個人の生活世界から社会的現実が構築される過程を重視する社会的構築主義に立脚し、方法ではフィールドワークを基本とする言説分析を重視してその妥当性を強調する。論述の基底には、自然科学パラダイムを範とする現代の社会心理学の動向を批判的にとらえなおして新たに社会心理学的構築主義を構想し、それを肉付けしようとの志向がうかがえる。論旨の展開には論者の思い込みや飛躍も散見されるが、関連所説の渉獵と詳細な実証資料に裏付けられた方法論の提示は、説得力をもち、社会心理学の将来に新たな水路を切り開く可能性を豊かに秘めている。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。